

一九七五年は二十世紀最後の四半世紀への門口であるとともに、昭和の五十年間を、われわれの同時代史のなかでふりかえってみるべき歴史の大きな結節でもある。

過去五十年間の後半は、中国が新しい革命国家としての道を歩んできた過程であったが、その中国も、中華人民共和国としてようやく四半世紀を経過したにすぎないことを思うと、四半世紀という歲月の流れは、急にしてまた緩だといえよう。今後二十一世紀までの四半世紀を日

●外交時評

今日の日本と「大国認識」

中嶋嶺雄 (東京外語大学助教授)

本はどのように歩んでゆくのであろうか。

「二十一世紀は日本の世紀」だと、ハーマン・カーン氏におだてられていい気でいられた七〇年代初頭は、日本が息つく間もないハイ・ピッチな時の流れを刻んで過ぎてきた一時期であったかに見える。そして、高度成長で肥大化した日本の対外的存在が急激に指弾されるようになり、とくにアジア各地の反日論が高まった。今からちょうど一年前、東南アジアを訪問した田中前首相にたいしては、悪夢のような反日デモがバンコク、そして、とくにジャカルタで

発生した。六〇年代のアジアにおいては、その革命外交や造反外交に示されるように、中国が「問題児」であったとするなら、七〇年代前半の「問題児」は明らかに日本であった。皮肉なことに、六〇年代の「問題児」中国は、七〇年代に入ると物腰の柔らかな青年に成長しつつあるのに、わが日本はいま「問題児」からやがて「非行青年」になるのか、それとも、「問題児」であった体験が逆にプラスして期待されるリーダーになるのかの岐路に立たされている。



そうしたなかでアジアの反日論に出遭ったとき、日本人は、いとも手軽に反省という言葉

口にした。だがいかに深刻ぶって反省し、ざんげしてみたところで、それだけでは現実の問題が解決するわけではない。日本とアジア諸国との深い関係は、すでに宿命的なものであるといえるのであり、それは、口をきわめて対目批判を展開するアジアのインテリや留学生たちに「では、すべてあなたがたでやるべきではないか」と問うと、今度は「それでは無責任だ」と責められる現実を考えれば十分であろう。

そのような状況のなかで、もしも日本が大国志向型の外交だけを求めたり、いわゆる、大国意識をちらつかせたりすることは、誠に慎まなければならぬであろう。だが、そのような点に気をつかうあまり、みずからを不必要に卑下し、「自己否定」してまで相手におもねることは、けつして正しい選択ではない。そのような態度では相手の信頼を得ることはできず、結局、一人よがりの自己満足におわるのが関の山である。

私はむしろ、われわれが正当な「大国認識」を欠如しているところにこそ問題があるように思う。つまり、好むと好まざるとにかかわらず、アジアにおける日本の影響力は今日きわめて大きいことにたいする無自覚をこの際まずは正すべきだといいたい。そのような「大国認識」を欠如しているからこそ、身勝手な海外での諸行動が横行するのであり、しばしば大国意識をちらつかせることにもなるのである。

われわれはこの点で正当でさわやかな「大国認識」のもとに、たとえばアジアで言論の自由が完全に保証されているのは日本だけであることに示される日本の「よさ」については、もっと胸をはって堂々と主張すべきであり、そのような自由の尊さをアジア諸国に輸出すべきでもあるであろう。このような「大国認識」はつまり自己認識であり、それはいうまでもなく、大国意識や大国主義とは根本的に異なるものである。